

客員研究員活動報告

## 原発事故を考える

安全安心社会研究センター 客員研究員 山本幹夫

東日本大震災の発生した昨年の流行語大賞は、明日への期待を込めて『なでしこジャパン』、そして清水寺の森清範貫主は『絆』と揮毫した。しかし私にとっての昨年の言葉は何と言っても『想定外』である。

安全の専門家を養成する長岡技大でシステム安全を学んだ私は、中小企業への研究開発事業の支援をするかたわら、労働安全コンサルタントとして企業の安全指導や、安全講習会を行ってきた。私の安全の話は少し理屈っぽいと断りながら、長岡技大で学んだガイド51で始まり、リスクアセスメントの進め方に及ぶが、幸いにも皆さんに熱心に聞いてもらっている。

そこで発生したのが、福島での原発事故である。絶対にないとされた全電源喪失、同一原因故障による緊急用自家発電装置の不作動、高圧蒸気の発生源に隣接するにも関わらず破裂板のない密閉建屋、有害物のフィルターをもたないベント装置など、報道されることの数々は私の理解した安全の原則からは信じられないことばかりであった。多重防護は一つの安全機能が失われても、別の機能で補完する、異種冗長性が望ましい、ではなかったろうか。リスクアセスメントでは、被害の大きさは最悪事態を想定しよう、法の規格は実施すべき最低限でそれだけでよしとしてはならない、危険源は過去の情報を最大限取り入れよう、ではなかったか。

ものづくりの現場の技術者出身の私は、実際には次々と不測の事態が起こることはよく承知している。今、安全指導を行う立場になって、どんなに準備をしても事故は起こるかもしれないが、それでも準備をやめるわけにはいかない。その進め方が国際ルールで整理されたリスクアセスメントであると指導してきた。

今回の原発事故の起こる以前の私は、原発に関して推進派でも反対派でもなかったが、電力の供給を無意識に享受していたことを見れば、容認派だったと言えるだろう。

これまでの関心の薄さそのものがけしからんと言われれば、それは率直に反省する。

事故後は報道される事実の数々に愕然としつつ、原発の技術課題などの報道にやきもきしながら注目してきた私の関心は、やはり原発の安全はシステム安全の原則に則っているか、もし原則に外れていたとしても原発に許されるならそれは何故だろう、ということであった。

恥づかしながら、私が事故以来読んだ原発関係の本を讀書順に示す。

原子力神話からの解放	高木仁三郎／講談社
原発を終わらせる	石橋克彦編／岩波新書
原発訴訟	海渡雄一／岩波新書
ドイツは脱原発を選んだ	ミランダ・A・シュラーズ／岩波ブックレット
震災と情報	徳田雄洋／岩波新書
原発のコスト	大島堅一／岩波新書
原発はなぜ危険か	田中三彦／岩波新書

ここでお気づきと思うが、これらは反原発の著者の執筆による。

私は原発を推進しようとする人たちの主張を述べた本も読んでみたいと思うのだが、私の知る範囲ではそのような本を見つけることはまだ出来ていない。どなたかよい本を紹介いただければお願いしたい。

しかし、先にあげた反原発の著者らが、身を削る思いで書いた本は

どにはないのではなからうか。政府の決定した情報は広報で全てが公開されている、というのとは違った次元の話である。また、電力会社の原発故障の事実は公開されているが、その故障がどのような意味を持つかは解説されておらず、一般人の情報にはなり得ていない。

原発事故の直後、東京電力の最高責任者は『想定外の津波の襲来により…』と説明したが、上述した本だけでも、事故の発生の可能性やその後の進展は十分に想定されうるものである。『想定されていたが、十分な対応がとれていなかった』というべきであったと思う。更に、東京電力は『行政の指導のもと、指示通りに全てやってきた』と繰り返し主張しているが、これは最低限の条件を満たしたにすぎず、それに加えて自分たちは危機に備えて何をしてきたかが問われるという安全管理の原則が忘れられている。

今回の原発事故が生じたことにより、原発は今後日本が当面の処理を終えるまで、最低でも数十年は向かい合っただけでゆかなければならぬ巨大なリスクを本質的に内包してきたことを、不幸にして露呈させてしまった。私はこの事実に向き合ってもっと深いところからの、関係者の『しまったァー』という心からの気持ちが、事故を受止めねばならない福島の人々や、多くの国民に伝わってこない限り、これから必要となる議論が噛みあわないのではないかと思う。

私は昨年末、原発事故を振り返って原発技術を冷静に見直してみよう、ということ趣旨とするシンポジウムに参加した。そこで、マスコミにもよく登場される原子力工学のある教授が、自分が見学したスイスの原発ではベントにはフィルター装置が狭い場所をうまく利用して設置されていること、自分は以前からフィルターの必要性を訴えているが、場所がないと関係者に言われて実現していなかったことを報告された。その講演が終わり、シンポジウムを主催された同じく原子力工学が専門の教授が、『本日は大変踏み込んだ話をされましたね。』

といった意味の感想を言われ、講演の労をねぎらわれた。そのやり取りを聞いていた私は、『ああ、やっぱり』と思った。原発の安全技術の構築には反対派も推進派もなく、必要であれば誰でも情報の共有ができ、必要な処置はなされるべきだと思う。そのような普通のことが途中で消えてしまう不思議な社会の構造がありはしまいか。

デンマーク人の監督が作った、『10万年後の安全』というドキュメンタリー映画がある。この映画は使用済み核燃料の最終処分をどうするかという課題についての映画であったが、この中に登場するフィンランドの人々は、反対派や推進派に関わらず、夫々の意見を自分の言葉で語っていることに感銘をうけた。私はこの映画に登場する人々のように、自分の言葉で語られることがリスクコミュニケーションの出発点と考えているが、特に日本で原発を推進しようとしている人々はこのことが大変苦手のようだ。

私はこれらのことを普通に出来ることが安全文化であり、これが真の意味で再構築されるまでは、現在の日本の社会において原発というリスクの大きな技術を運用する資格はないのではないかと考えている。